

つづいて、科目名と実際の教育内容の一致・不一致の問題に目を向けてみましょう。全部で866の比較文学比較文化関連科目のうち、科目名に「比較」とついていない科目は34%にのぼります。実は、この結果は、シラバス調査の精度に関する難しい問題を示唆します。といいいますのも、一次調査と三次調査では、主に「比較」というキーワードでシラバスの検索をしています。そのため、調査の方法上、採取されなかった科目が存在する可能性が残るのです。ですが、その可能性を考慮した上で、「人ベース」の二次調査をかけておりますので、かなりの部分を補えたのではないかと考えております。

科目名に「比較」とついている／いないに関する分析からは、今回の調査における専門家の知見の重要性もわかります。スクリーニングでは、比較文学比較文化研究を専門とする複数の先生方が科目内容を確認していき、実際には比較文学比較文化を教えていない科目を削除したのですが、スクリーニング結果をみると、第一次から第三次の調査で採取された科目の中で比較文学比較文化を教えていない科目群、つまりスクリーニングにより削除された科目群の中には、209もの「比較」と名のついている科目が含まれていました。この数字が示すのは、科目名に「比較」と含まれていたり題目や説明文等から比較文学比較文化関連科目のようにみえたりしても、実際には比較文学比較文化と関係がないというケースが相当数あるということです。そして、このことが分かったという事自体が、人海戦術だけではなく専門家の知見を盛り込むことができた本調査の成果の一つであるといえるでしょう。

最後にまとめると、本シラバス調査では、日本の大学で2021年度に開講された比較文学比較文化関連科目を調査し、その教育の実態を明らかにしました。この調査により、比較文学比較文化教育を実施している科目の母集団866科目というものが特定され、その統計分析が可能となりました。現在、このデータをもとにした分析が進められているところです。

では、私のほうからは以上となります。ご清聴ありがとうございました。続きましては、町田樹先生から、このシラバス調査に続いて実施された統計・記述調査のお話をさせていただきます。

### 3. 新たな方法論2——統計・記述調査

それでは、ここからは再び私町田より、「統計・記述調査」の概要と結果について、お話ししていきたいと思います。

冒頭で簡単にご説明しましたが、今回の統計調査は以下の形式で実施しました。

■調 査 名：「比較文学比較文化についての統計調査」

■調 査 期 間：2022年5月12日～7月31日

■質 問 紙 構 成：4部構成・計32問

パートⅠ「調査対象者の属性に関する問い」全5問

パートⅡ「調査対象者の研究活動に関する問い」全5問

パートⅢ「調査対象者担当の比較文学関連科目に関する問い」

全17問

パートⅣ「比較文学比較文化教育についての問い」全5問

■質 問 紙 形 式：Google Form

■サンプリング：割り当て抽出法：井上健・今橋映子担当

■データ回収率：84回収 / 134配布 = 回収率（有効回答率）64%

■統計分析方法：SPSS Ver.24

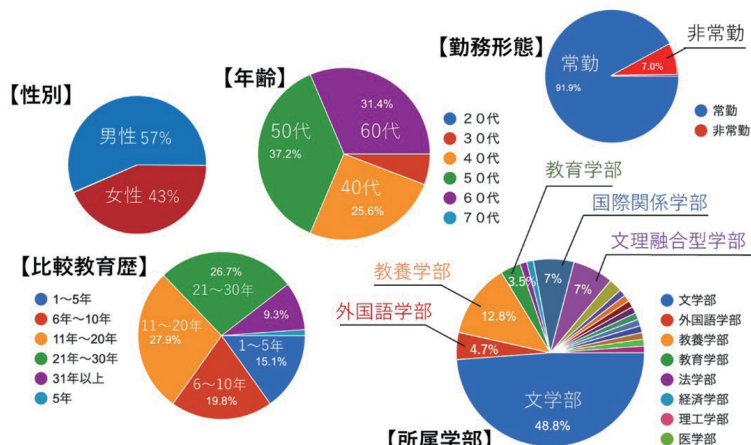
## 属性に関する傾向

それでは早速、この調査のデータをご覧くださいと思います。

まずは、対象者の属性に関する傾向を見ていきましょう。

【図3】に、属性に関する主要データをまとめてみました。と言っても、属性に関するデータは、シンプルに見たままの情報ですので、あまり解説するところはありません。

【図3】調査対象者の属性



「性別」、「年齢」、「大学での勤務形態」に関するデータについては、【図3】のような結果になっています。

それから、「比較文学に関する教育歴」は、11年～20年、21年～30年といった教育経験の厚い方から、1～5年、6～10年といった新人・中堅の方まで幅広くいらっしゃいます。

また、「所属学部比率」は、やはり文学部が48.8%と大多数を占めています。ただ、残りの50%は、外国語学部、教養学部、教育学部、国際関係学部、文理融合型の学部を筆頭として、様々な学部で構成されています。ここからわかることは、比較文学というのは、基本的に文学部に根付いている学問ではあるものの、人文社会学系のあらゆる学部に加え、少数ながら自然科学系の学部においてさえも授業が開講されており、教育現場が非常に多様だということです。これは比較文学が、「学際的学問」であるということと無関係ではないように思います。

## 研究活動に関する傾向

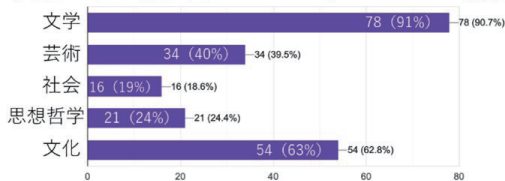
さて、次々にデータをお示ししたいと思います。

【図4】にまとめたのは、対象者の研究活動に関する傾向です。

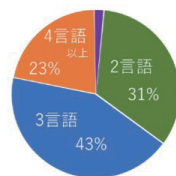
比較文学は、実に多様なエリア、多様なジャンルの研究対象を扱う学問領域です。この学問としての特性が、そのまま現れているようなデータになるかと思い

【図4】調査対象者の研究活動に関する傾向

【専門とする研究対象のジャンル】



【使用言語数】

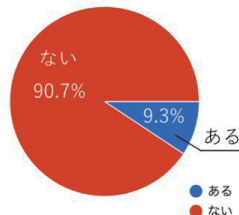


【研究対象に関わりのある国】

●日本 ●アメリカ ●イギリス ●フランス  
 ●ロシア ●中国 ●韓国 ●ドイツ ●スペイン  
 ●ポーランド ●イタリア ●ベルギー ●インド  
 ●パキスタン ●古代ギリシア e.t.c

計28か国

【比較の教科書執筆経験】



ます。

「専門としている研究対象のジャンル」についてですが、やはり91%と大多数が文学を研究対象にしていることがわかります。これは当然の結果ではありますが、一方で、文学以外のジャンルについても取り扱うのが比較文学比較文化の特徴です。40%が芸術系ジャンルを、19%が社会系のジャンルを、24%が思想哲学系のジャンルを、63%が文化系のジャンルについて研究しています。

もちろん、ジャンルだけでなく、対象とするエリアも幅広いです。今回集計した結果、【図4】における「研究対象に関わりのある国」に示しました通り、日本、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国、韓国を筆頭に、計28か国もの様々なエリアが研究対象になっていることが明らかとなりました。また、大抵の比較文学者の方は、お一人で複数のエリア、複数のジャンルを扱います。ということは、複数のエリアを扱えるだけの語学能力と、複数のジャンルを扱うことのできる知識・教養が求められることになるわけですが、【図4】の「使用言語数」に示しました通り、多くの方が二言語以上の言語に精通しています。

それから冒頭で今橋先生もお話しになられていましたように、2022年9月現在、比較文学のハンドブックを制作する研究が進められているわけですが、「比較文学関連教科書に関する執筆経験の有無」を問うてみると、ほとんどの方が、「執筆経験がない」とお答えになりました。つまりこの結果から、比較文学ハンドブックのような教科書はあまり前例がなく、この学問領域においては有意義なものになり得るだろうと、推測することができます。

なお、この属性に関する傾向と、研究活動に関する傾向については、シラバス調査のデータが示す傾向と大きな差はありません。したがって、この「統計・記述調査」ではサンプリングが的確に行われ、「比較文学比較文化教育界」という、母集団の縮図グループをうまく作ることができたのではないかと思います。よって、これから示すデータの多くは、調査を行った縮図グループだけでなく、母集団そのものの傾向を示していると捉えていただいても差し支えありません。

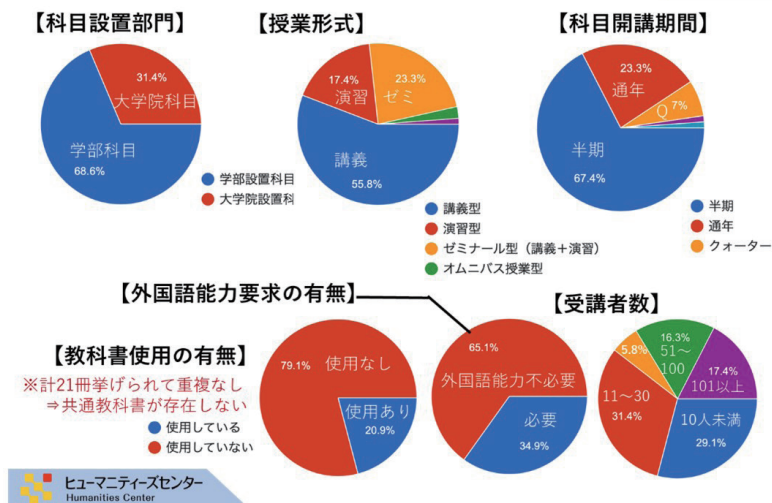
## 科目・授業に関する傾向

続きまして、対象者が担当している比較文学関連科目・授業の傾向です。【図5】をご覧ください。

まず「比較文学の科目設置部門」に関するデータですが、学部と大学院で、およそ7対3の比率となっています。

「授業形式」は、講義形式が56%と過半数を占め、演習形式が17%、講義と演習をミックスさせたゼミナール形式が23%となっています。

【図5】調査対象者担当の比較文学関連教育に関する傾向 1



「科目開講期間」をみると、約70%とほとんどが半期科目ですが、通年科目や、クォーター制の科目も、わずかに存在しています。

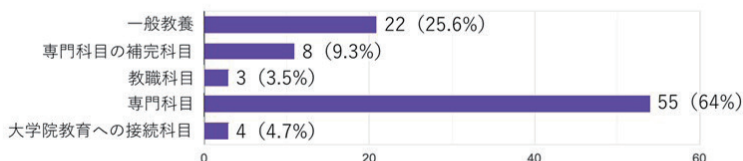
それからハンドブック研究においては、「教科書使用の有無」も大事なデータになるかと思います。このデータを集計すると、80%という大多数の授業で教科書が使用されていないことがわかりました。一方、20%ほどの授業では教科書が用いられていますが、どのような教科書を使用しているか著作のタイトルを聞いたところ、実はひとつも重複しているタイトルがありませんでした。これはつまり、比較文学の領域において、共通の教科書、もしくは決定版となるような教科書が存在していないことを意味しています。

そして、比較文学の研究においては、語学が重要となりますが、こと授業に関しては、「外国語能力要求の有無」をご覧くださいとわかる通り、それほど語学能力が求められているわけではなく、ほとんどの授業では語学能力を求めています。

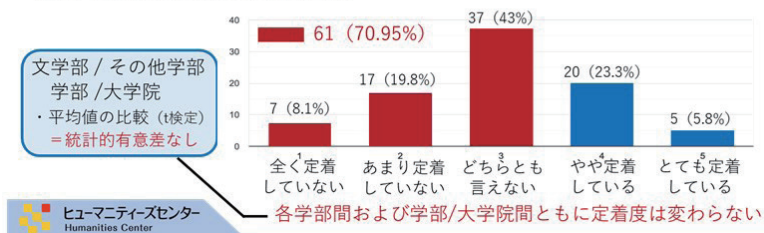
また、「受講者数」の傾向を確認すると、大小様々な規模の授業が行われていることが見て取れます。おそらく演習やゼミ形式の授業は、10人未満や30人までの間で行われているものと推測できます。また51人以上のデータについては講義形式の受講者数を表しているものとも思います。このデータからは100人以上の大講義も、それなりに開講されていることがわかります。

【図6】調査対象者担当の比較文学関連教育に関する傾向2

### 【科目が設置されている目的】



### 【大学における比較教育の定着度】



次に、【図6】をご覧ください。

「科目が設置されている目的」ですが、ほとんどが専門科目、一般教養科目として位置づけられているようです。

それから、「大学における比較教育の定着度」という部分をご覧ください。これは、「比較文学比較文化の存在が、大学において定着していると思いますか？」という問いに対して、「1 = 全く定着していない」から「5 = とても定着していると思う」までの5段階で回答していただいた結果です。ご覧いただくと、「3 = どちらとも言えない」が最も多く、そこを中心に、定着していない～定着しているまで、正規分布になっていることがわかります。「1 = 全く定着していない」から「3 = どちらとも言えない」までの赤で示した回答は、比較文学教育が所属大学もしくは大学院において決して安泰ではない、ということを意味しますが、この赤い部分だけで70%も占めることがわかりました。多くの方々が、比較文学教育が十分定着していないと考えているようです。その理由については、この後お示しいたします。

## 自由記述式回答の傾向と分析

さて、ここからは自由記述式の回答結果をお示しいたします。

大抵の場合、自由記述式の問題については、無回答であったり、一言で簡単に済ませるような回答が多いのですが、今回の調査ではどの対象者からも、とても



丁寧なご回答を得ることができました。本日はそうしたたくさんの貴重な回答を取りまとめて、代表的なものを提示してみたいと思います。

まずは、「比較文学教育に関連する教科書にどのようなことを求めますか？」という教科書に対するニーズについての回答です。

この回答を取りまとめてみると、教科書に盛り込むべき内容についての回答が最も多かったです。要望されている内容は、大きく分けて四つ。比較文学の理論体系と各理論の解説、比較文学の歴史、比較文学で扱うテーマとジャンルに関する説明です。あとは、英語圏以外のトピックや授業で実際に使えるテキスト教材、という意見も多く出ていました。それから最も多かったのは、理論などを解説することはもちろんのこと、その理論の応用例や、その理論を使ってどのように作品分析を行えば良いのかという、具体例を盛り込んで欲しいという意見でした。つまり、比較文学のディシプリンをどのように役立てることができるのか、を実例と共に示せる教科書が要望されているようです。

続いて、「比較文学教育について、何か問題点や困難を感じていますか？」という問いへの回答です。こちらを読み込んでみると、大きく三つの問題点が挙げられていました。一つ目が、比較文学の理論体系が広すぎて、その全てを体系的に教えることが難しい、ということ。二つ目は、学生の語学・教養レベルにばらつきがあるため、一律に教えることができない、ということ。それから三つ目は、そもそも最近の学生は文学に興味を持っておらず、授業内容に関心がないということです。つまり、現状の比較文学の大学教育は、ここに示しましたように、語学の問題、広範すぎる理論体系の問題、学生の文学離れの問題、という三大困難を抱えていると言えるでしょう。

そして今回お示しする最後のデータが、「大学において比較文学教育が定着していない理由」に関する回答です。

これは統計的ではなく、あくまで回答を読み込んだ私個人の見解ですが、文学部とその他の学部にも所属されている方で、定着していない理由が若干異なります。

まず、文学部以外に所属する方の見解としては、比較文学の専門家でない方が科目を担当している、比較文学の授業がなくなるなど縮小している、比較文学の特徴である学際性に関する理解があまりないために重視されない、などの見解が多く、比較文学の教育内容および教育者の水準に関する危惧が多くみられました。

対して、文学部の方は、比較文学を専門的に教えられる人材がいるにもかかわ

らず、学部のカリキュラムやディシプリンなどの制度に、比較文学が組み込まれていないことを問題視している見解が目立ちました。それゆえに、比較文学を体系的に教えることができない、というわけです。また、学部人事において、例えば日本文学、英文学、フランス文学などの各国文学者に比べて、比較文学の専門家が劣勢になる傾向があり、比較文学教育のための任用人事がうまくいかないという組織的な問題も散見されました。つまり、教育内容や教育者の水準というよりも、文学部所属の方の回答は、学部の制度的な問題や、組織的な問題にフォーカスが当てられていた、ということです。

## 統計・記述調査に関するまとめ

さて、いよいよまとめに入っていきたいと思います。

ここで示したデータの解釈については、後ほど井上先生や今橋先生がお話しくださると思いますので、私の方からは社会調査を文系学問の教育現場に適用することの意義について、述べてみたいと思います。

まず第一に、大学の研究・教育者にとって、他者の授業のあり方をみる機会ほとんどないと思いますから、このような形で、全国の授業のあり方や、その授業を担っている方々の考えを一手に伺えることは、ファカルティ・ディベロップメントの観点において重要だと考えます。

それから第二の点が特に大事だと思うのですが、普段、私たちは授業について「こんな時どうしている？」ですとか「どのように教育すれば良いだろうか?」「学生の学習態度はどうだろうか?」などと、同僚と私的に議論したりしますし、自分の授業を見直して、自分で改善したりもします。しかし、こうした私的な議論や、私的な改革はできても、それを大学や学会単位の公的な場で行うことは容易ではありません。最近ではファカルティ・ディベロップメントの取り組みも推進されていますが、各学問の授業内容について個別に議論することなど、ほとんどないように思います。今回お示ししたような社会調査のデータは、それ自体がひとつのエビデンスとなり、これまで私的レベルで行ってきた議論や改革を公的化することに役立つのではないかと——つまりデータが、学部や学会などの公的組織を動かす一つの原動力になるのではないかと、考えました。

少し駆け足ではありましたが、以上が私からの報告となります。

ここからは韓先生にバトンをお渡しし、韓国における比較文学教育について、お話しいただきます。韓先生、よろしくお願いいたします。